

研究ノート

スポーツ活動での言葉かけにおける競技者と指導者の 認知の違いについて

—やる気を高める言葉かけを対象として—

渋谷 聡

How athletes and coaches differently perceive verbal feedback in sports
—verbal feedback that motivate athletes—

SHIBUYA Satoshi

The purpose of this study is to compare how athletes and coaches perceive verbal feedback in sports differently. There are three elements found at the time of the preliminary research, including “praise,” “scolding,” and “encouragement.” There are significant differences between how athletes and coaches perceive “praise” and “scolding.” Coaches think that “praising” motivates athletes more than athletes do. Coaches also think that “scolding” motivates athletes more than athletes do. There is no clear difference between how athletes and coaches perceive “encouragement.”

Keywords : coach, athlete, motivation, verbal feedback

キーワード：指導者、競技者、やる気、言葉かけ

はじめに

競技スポーツにおいて、常に競技者がやる気を高めた状態で練習に励むことは容易なことではなく、指導者はスキルトレーニングやフィジカルトレーニングを行うとともに、競技者がパフォーマンスを発揮する手段の1つとして、やる気を高めることも指導方法として必要となる。

このやる気は、心理学やスポーツ心理学でいうところの動機づけの問題として研究されてきている。スポーツにおける動機づけ研究では、大きく動機理論、期待-価値理論、目標理論に基づいて行われている。動機理論は、「特定の動機が存在の有無と水準が動機づけを規定する (伊藤、2004)」という立場から、困難なことを成し遂げ、優れた業績を上げて成功することを求めるという McClelland の達成動機理論が典型だとされている。この理論に基づいた研究として、西田・猪俣 (1981) がスポーツにおける達成動機の構造を検討している。

また、松田ら（1981）は、スポーツ選手の意欲に関する心理的適性を明らかにしている。期待－価値理論では、「刺激に対する認知的処理に依存してもたらされる期待と価値（感情）のいずれか、あるいは両方の水準が動機づけを規定する（伊藤、2004）」という立場をとっている。この典型は、Atkinson の達成動機づけ理論がある。西田（1978）は、達成動機と勝敗の主観的認知が運動パフォーマンスに与える影響を明らかにしている。目標理論は、「達成場面で個人が達成する目標の種類やその意味づけが動機づけを規定する（伊藤、2004）」という立場であり、伊藤（1996）は課題目標を持つ選手ほど競技意欲や有能感が高いことを明らかにしている。

これらの理論に基づいて行われている動機づけとスポーツの研究を理解した上で、スポーツ場面の指導を行っていくことが重要であり、伊藤（2000）も、スポーツ実践において選手や生徒を理解し、いかにしてよりよい指導を行うことができるかという意味において、動機づけ研究は重要な役割を担っていると指摘している。

このスポーツにおける動機づけについて、近年、言葉かけとの関係を研究している論文が、少しずつではあるが増えている。例えば、大道ら（2002）によると、スポーツ場面において、サッカーのリフティングを課題として言葉かけの実験を行っている。その結果、子どもは指導者からの否定的な言葉かけはやる気を低下させ、肯定的な言葉かけはやる気を高めるとし、初心者の初期段階において、ほめる指導は技術レベルの上達速度を向上させていくために効果的であることを示唆した。同様に、矢澤（2007）は、文献研究によって成功や失敗場面を問わず、自分を肯定的に評価してくれる言葉かけはうれしいと感じてやる気が沸いてくるのに対して、否定的な評価である言葉かけは嫌だと感じ、やる気を失ってしまうと報告している。

一方、大道（2002）や矢澤（2007）とは異なる結論を導き出している報告もある。名取（2007）は、少年サッカー大会に出場した小学校5、6年生男子を対象に、指導者の言葉かけが選手のやる気に与える影響を検討した結果、否定的な言葉かけでも場合によってはやる気が高まったとしている。

これら動機づけとスポーツ活動での言葉かけについて、上述したものの以外にもいくつかの課題がある。例えば、指導者が競技者のやる気を高めるためにかけている言葉かけが、必ずしも競技者がポジティブに捉えてやる気が高まっているとは限らないということである。つまり、指導者が競技者に対して、競技者のやる気が高まると思って使用している言葉かけが、はたして競技者は指導者と同じようにやる気が高まると認知しているかということである。指導者だけが、競技者のやる気を高める言葉かけだと思っている場合や、競技者が指導者の思うほどやる気が高まる言葉かけでない、あるいは逆にやる気が下がってしまった場合は、競技力向上を目的として行っている言葉かけが、逆に競技者と指導者の信頼関係も崩れかねない。

スポーツにおける動機づけと類似した研究に、体育実技と学習意欲を検討した研究がある。しかし、ここで注意しておきたいことは、スポーツ活動と体育実技を同義語として考えていくのではなく、2つのことを分けて考えていく必要があるということである。例えば、山村（2001）によると、大学1年生を対象に、小学校から高校までの体育・スポーツ活動時における教員や指導者から言われた「うれしかった言葉」と「いやだった言葉」を調査している。

しかし、この調査の体育場面では、スポーツを素材としながら教材としてどう加工するかという点がスポーツ活動と明らかに異なるため、同じ状況としてとらえること自体無理があるだろう。また、矢澤（2007）の研究においても、スポーツ場面での叱り言葉の影響について検討しているが、この手続きにおいて「スポーツ場面での研究がほとんど見あたらないので、一般学校場面における研究についてみていく」としている。もちろん、スポーツ場面と体育実技場面ではスポーツ種目を対象としているということを含め共通点は多い。しかし、その目的において勝負という競技志向の強い競技スポーツと学習指導要領に基づいて競技力を上げることのみを主目標としていない体育実技場面ではそもそも生徒や選手に求められるものが違う。また、競技スポーツではスポーツが好きな人が選手として参加していることが多いのに対し、体育実技場面では体育が苦手である、あるいは好きではない生徒も対象としている。このような状況から、教師や指導者が求められているものや教師－生徒間と指導者－選手間の関係が違うと考えられる。一方、スポーツ場面が課外活動としての運動部活動を含むことも多く、教師が指導者である場合が多いことから、小谷（2003）は、教師である指導者の教育的空間と競技的空間との狭間で抱く葛藤について、指導援助、部活動の方向性、周囲との関係性の3つの内容で葛藤しているという報告もある。

なお、本研究でいう「やる気」とは、名取（2007）のいう、「次も成功する（失敗する）という期待」である期待－価値理論ではなく、動機理論からみた動機づけに焦点をあてることとする。

1. 目的

本研究では、スポーツ活動時での指導者が競技者のやる気を高める目的で行っている言葉かけについて、競技者と指導者の認知の違いを比較することを目的としている。これによって、指導者が競技者のやる気を高める目的で行っている言葉かけが、競技者が本当にやる気を高める言葉かけとして認知しているかを明らかにしていきたい。そのためには、具体的には以下のような調査を行う。

我が国では、中学校や高校の運動部活動と言われるスポーツ活動や地域で行われるスポーツ活動は古くから行われている。そこで、指導者は競技者のやる気を高める言葉かけを指導の一環として行っている。それにも関わらず、運動やスポーツ活動で、指導者が競技者に指導する際にやる気を高めるために用いている言葉かけの尺度が見当たらないことから、予備調査として「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」の客観的な尺度を作成し、信頼性や妥当性を検討することとした。北村（2001）によると「量的な研究方法は条件が統制された客観的分析による数値を用いた実証性を特徴とするのに対し、質的な研究方法では個別的な意味という対象者の主観性を用いた実証性を特徴とする」としている。本研究では、質的な研究方法を否定するものではなく、あくまでも客観的分析による数値を用いて実証することを目指している。

次に、本調査では、「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度を競技経

験者と指導経験者とで比較することによって、両者の認知の違いを明らかにする。本研究を行うことによって、競技者のやる気を高める言葉かけを明らかにし、競技者・指導者のコミュニケーションをより深めることによって信頼を深め、共生を広めていくことができると考える。指導者と競技者は指導する・されるというお互いが対等の立場ではないが、両者の信頼関係が成立した上で指導は成り立つことから、この信頼関係はお互いが相手を認めることがとても重要な要素と考える。

2. 予備調査「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度の作成、および信頼性、妥当性の検討

1) 方法

(1) 調査対象者と手続き

表1に示す通り、通学制大学および通信制大学に通う大学生132名に対し、事前に調査目的及び個人情報に関する同意を得た上で、授業開始前に調査用紙を配布した。その中で、これまでに、定期的（週3回以上）なスポーツ経験のある、またはこれまでにスポーツを定期的に指導（週1回以上、6か月以上）したことがあると答えた105名を本研究の調査対象とした。調査期間は2014年9月から2015年3月とした。なお、本研究の被調査者は、教科外の活動としての運動部活動だけではなく、スイミングスクールや地域クラブなどの教科外活動でのスポーツ活動を含む。

表1 被調査者の特性

	人数（男性、女性）	平均年齢（男性、女性）
指導経験者	15名（14名、1名）	29.6歳（29.9歳、28.0歳）
選手経験者	90名（75名、15名）	20.7歳（21.0歳、19.7歳）

表2 指導経験者数および平均指導歴

	指導経験者数（人）	平均指導歴（年）
陸上競技	4	4.8
バレーボール	3	10.0
サッカー	2	4.0
野球	2	4.0
ソフトボール	1	11.0
水泳	1	7.0
バスケットボール	2	6.0
合計	15	平均 7.7

表3 選手経験者数および平均競技歴

	指導経験者数 (人)	平均競技歴 (年)
陸上競技	7	4.7
バレーボール	13	5.8
サッカー	8	6.6
野球	10	5.2
ソフトボール	1	3.0
水泳	4	7.0
バスケットボール	11	4.5
テニス	10	4.1
バドミントン	4	3.8
ラグビー	1	3.0
ハンドボール	1	4.0
柔道	3	8.3
剣道	2	5.5
空手	3	15.7
ヨット	4	2.0
ダイビング	3	1.5
未記入	5	—
	合計 90	平均 5.3

(2) 調査内容

事前に調査として自由記述によって得られた質問項目や、これまでの「スポーツ指導」、「言葉かけ」に関する論文からキーワードを抽出し、152項目からなる「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度を構成した。被調査者のうち、競技経験者は、「スポーツ場面において、以下のことを指導者から言われたときに、やる気が高まったか」について質問された。また、指導経験者は、「スポーツ指導場面において、言葉かけとして以下のことを言ったときに、競技者のやる気が高まったと思うか」について質問された。

回答方式は、これらの質問項目に対して「1. 全くやる気が高まらない」から「5. 非常にやる気が高まる」の5段階評定で行った。

調査では、これ以外にも「年齢」、「性別」、「学年」、「今までのスポーツ種目」、「指導歴（競技歴）」、「最高成績」を基礎データとして収集した。

(3) 分析方法

予備調査の尺度作成および信頼性の検討として、因子分析及びその信頼性を検出するために、統計解析ソフト「SPSS Statistics version22」を用いた。

(4) 尺度の信頼性および妥当性の検討

本研究で作成した「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度の信頼性を検討した。内的整合性を明らかにするため折半法として Cronbach の α 係数を算出した。また、大学生 51 名 (18~20 歳、男子学生 41 名、女子学生 10 名、平均年齢 18.7 歳) を対象に 3 週間の間隔で再検査法を行い、安定性に関する信頼性の検討も行った。1 回目の調査は 2015 年 5 月第 2 週目とし、2 回目の調査 2015 年 6 月 1 週目に行った。

妥当性の検討では、基準関連妥当性として、本研究で作成した尺度と心理的能力競技能力診断検査の「勝利意欲」および「自己実現意欲」との相関関係から併存的妥当性を検討した。

2) 結果

(1) 尺度の選定

まず、因子構造を検討するために、全 152 項目の基礎統計量を求めた上で回答に極端な偏りのある 17 項目が削除された。

次に、残された 135 項目に対して重みづけのない最小 2 乗法 (バリマックス回転) による因子分析を行った結果、3 因子が抽出された。その後、因子負荷量が .40 以下に満たしていない項目や 2 つ以上の因子にわたって .35 以上負荷している 58 項目を削除し、残りの項目に対して再度同様の手続きによる因子分析を繰り返したところ、表 4 に示すような結果が得られた。

第 I 因子は 10 項目で構成され、「前よりも良くなったね」、「フォームが良くなったね」、「今のいいね」といった「称賛」することについて説明できることから、「称賛」因子と命名した。

9 項目で構成された第 II 因子は、「何をやっているんだ」、「何でできないんだ」、「だからダメなんだ」、「やる気あるのか」といった「叱責」を表していると考えられることから「叱責」因子と命名した。

第 3 因子は 5 項目で構成され、「優勝する」、「何度も練習するんだぞ」、「もっとできる」といった選手を鼓舞する表現であることから、「鼓舞」因子と命名した。

因子の寄与率は第 I 因子が 25.83%、第 2 因子が 21.31%、第 3 因子が 9.84% であり、累積寄与率は 56.98% であった。

(2) 尺度の信頼性および妥当性の検討

本研究で開発された「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度の信頼性を検討した。内的整合性を検討するために尺度を構成する各因子について、Cronbach の α 係数を算出した (表 4 参照)。

その結果、第 I 因子の「称賛」因子は、 $\alpha=.88$ 、第 II 因子の「叱責」因子は $\alpha=.95$ 、第 III 因子の「鼓舞」因子は $\alpha=.89$ という高い値を示した。

また、再検査法による信頼性の検討を行った結果、第 I 因子の「称賛」因子では $r=.765$ ($p<.001$)、第 II 因子の「叱責」因子では、 $r=.551$ ($p<.001$)、第 III 因子である「鼓舞」因子では、 $r=.778$ ($p<.001$) を示した。

さらに、併存的妥当性を検討するため、本研究で作成した「スポーツ活動での競技者のや

表4 「運動・スポーツ活動時での選手のやる気が高まる言葉かけ」尺度の因子分析結果

質問項目	平均値 (SD)	因子負荷量			共通性
I. 「称賛」因子 ($\alpha=.88$)					
79. 「前よりも良くなったね」と言われたとき	3.87 (.86)	.87	.08	.04	.76
80. 「フォームよくなったね」と言われたとき	3.88 (.893)	.86	-.01	.17	.77
93. 「今のいいね」と言われたとき	3.78 (.861)	.80	-.04	.22	.70
76. 「おめでとう」と言われたとき	3.81 (.882)	.77	.04	.17	.62
69. 「良くできているよ」と言われたとき	3.63 (.922)	.75	-.11	.28	.65
97. 「うまいねえ」と言われたとき	3.72 (.88)	.75	-.09	.15	.59
40. 「そのプレーいいね」と言われたとき	3.71 (.95)	.74	.02	.28	.63
142. 「調子がいいぞ」と言われたとき	3.40 (.88)	.68	.05	.17	.49
152. 「できるじゃん」と言われたとき	3.66 (.98)	.64	-.11	.29	.51
32. 「OK」と言われたとき	3.48 (.85)	.63	-.09	.20	.45
II. 「叱責」因子 ($\alpha=.95$)					
71. 「何をやっているんだ」と言われたとき	2.09 (.88)	-.02	.83	.16	.71
70. 「何でできないんだ」と言われたとき	2.18 (1.00)	-.05	.81	.08	.67
86. 「だからダメなんだ」と言われたとき	2.21 (1.02)	-.14	.79	.12	.66
55. 「やる気あるのか」と言われたとき	1.99 (.97)	-.07	.76	.07	.59
87. 「違う」と言われたとき	2.28 (.94)	.03	.76	.15	.60
61. 「難しいかな」と言われたとき	2.31 (1.05)	.09	.71	.09	.52
47. 「ダメだ」と言われたとき	2.23 (.94)	-.15	.69	.16	.52
62. 「もう終わったな」と言われたとき	1.87 (1.05)	-.08	.67	.07	.46
84. 「お前」と言われたとき	2.62 (.95)	.23	.60	-.02	.41
III. 「鼓舞」因子 ($\alpha=.98$)					
44. 「優勝する」と言われたとき	3.57 (1.17)	.23	.12	.74	.62
42. 「何度も練習するんだぞ」と言われたとき	3.21 (1.08)	.28	.23	.66	.57
135. 「声出して」と言われたとき	2.95 (.87)	.28	.21	.56	.44
46. 「家族に良いところを見せるぞ」と言われたとき	3.16 (1.19)	.31	.12	.53	.39
22. 「お前はもっとできると思っている」と言われたとき	3.23 (1.07)	.30	.14	.47	.33
寄与率 (%)		25.83	21.31	9.84	
累積寄与率 (%)		25.83	47.14	56.98	

る気が高まる言葉かけ」尺度と心理的競技能力診断検査 (DIPCA) の「競技意欲」および「自己実現意欲」と相関関係を調べた。その結果、表3の通り、第I因子の「称賛」因子と「勝利意欲」では、 $r=.531$ ($p<.001$)、「自己実現意欲」尺度では、 $r=.468$ ($p<.001$)であった。第II因子の「叱責」因子と「勝利因子」尺度では、 $r=.037$ 、「自己実現尺度」では、 $r=.255$ であった。第III因子の「鼓舞」因子と「勝利意欲」では、 $r=.599$ ($p<.001$)、「自己実現意欲」では、 $r=.508$ ($p<.001$)であった。

表 5 各因子と勝利意欲、自己実現意欲との相関

	勝利意欲	自己実現意欲
「称賛」因子	.53***	.47***
「叱責」因子	.04	.26
「鼓舞」因子	.60***	.51***

*** p<.001

3) 考察

本研究において、「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度の開発と信頼性および妥当性を検討した結果、「称賛」因子、「叱責」因子、「鼓舞」因子の3尺度で構成されその信頼性・妥当性を概ね支持するものとなった。しかし、併存的妥当性を検討するために行った「叱責」因子と心理的競技能力診断検査の「勝利意欲」および「自己実現意欲」の間に有意な相関が認められなかった。このことは、競技者が指導者に叱責をされてやる気が高まっても、必ずしも勝ち負けに対する意欲、あるいは自己実現意欲が高まるとは限らないことを意味する。つまり、競技者が指導者に叱責の言葉かけをされると、それが直接競技者自身の勝利意欲や自己実現意欲が高まるのではなく、他の要因を介して間接的に勝利意欲や自己実現意欲に関わっていく可能性も考えられる。併存的妥当性の対象項目も含めたこれらの詳細な検討は、今後の課題として継続的に取り組んでいく必要がある。

3. 本調査「競技者と指導者のやる気を高める言葉かけによる認識の違い」

1) 方法

(1) 調査対象者と手続き

通学制大学および通信制大学に通う大学生 101 名に対し、事前に調査目的及び個人情報に関する同意を得た上で、授業開始前に調査用紙を配布した。その中で、定期的なスポーツ経験のある、またはスポーツを定期的に指導したことがあると答えた 81 名（選手経験者 68 名、指導経験者 13 名）を本研究の調査対象とした。調査期間は 2015 年 6 月から 2015 年 10 月とした。

表 6 被調査者の特性

	人数（男性、女性）	平均年齢
指導経験者	13 名（12 名、1 名）	31.5 歳（31.8 歳、27.0 歳）
選手経験者	68 名（53 名、15 名）	21.1 歳（21.2 歳、20.5 歳）

表7 指導経験者数および平均指導歴

	指導経験者数 (人)	平均指導歴 (年)
陸上競技	2	12.5
バレーボール	3	4.7
サッカー	2	4.0
野球	2	6.0
バスケットボール	1	7.0
柔道	1	4.0
空手	1	8.0
ハンドボール	1	3.0
合計	13	平均 6.2

表8 選手経験者数および平均競技歴

	選手経験者数 (人)	平均競技歴 (年)
陸上競技	5	3.6
バレーボール	7	6.7
サッカー	8	7.1
野球	14	4.2
水泳	3	7.3
バスケットボール	6	5.3
テニス	5	5.0
バドミントン	7	4.9
ハンドボール	1	3.0
柔道	2	8.0
剣道	3	10.3
空手	1	7.0
器械体操	4	3.8
未記入	2	—
合計	68	平均 5.9

(2) 調査内容

予備調査で作成した「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度を用いて、選手経験者と指導経験者による比較を行った。

(3) 分析方法

「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度における競技経験者と指導経験者の比較を行うため、統計解析ソフト「SPSS Statistics version22」を用いて、「称賛」、「叱責」、「鼓舞」の3尺度ごとに、対応のないt検定を行った。

2) 結果

本研究では、競技者が指導者に言われた言葉かけが必ずしもやる気を高めるとは限らないこと、あるいは指導者が競技者のやる気を高める目的で発した言葉かけが、逆に競技者のやる気を下げる可能性もあることから、競技経験者と指導経験者のやる気を高める言葉かけによる認知の比較を行った。

その結果は、表 9-1 から 9-3 および図 1-1 から 1-2 に示す通り、「称賛」では、指導経験者が競技経験者よりも有意に高い値を示し「叱責」では、指導経験者が競技経験者よりも有意に低い値を示した。しかし、「鼓舞」では、指導経験者と競技経験者の間に明らかな違いは認められなかった。

表 9-1 「称賛」の対応のない t 検定結果

	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
指導経験者	4.17	.36	4.28	.007**
選手経験者	3.61	.71		

**p<.01

表 9-2 「叱責」の対応のない t 検定結果

	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
指導経験者	1.82	.56	-2.12	.037*
選手経験者	2.31	.78		

*p<.05

表 9-3 「鼓舞」の対応のない t 検定結果

	平均値	標準偏差	t 値	有意確率
指導経験者	3.44	.41	.59	.56
選手経験者	3.30	.84		

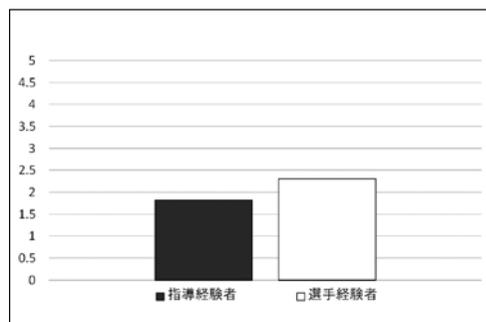
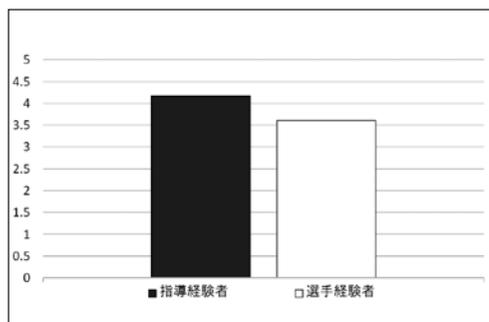


図 1-1 「称賛」指導経験者と選手経験者の比較 図 1-2 「叱責」指導経験者と選手経験者の比較

3) 考察

本研究は、やる気を高める目的で、指導者が競技者に行う言葉かけが本当に選手のやる気を高めるのかを明らかにすることであった。

結果から言えることは、指導者が競技者のやる気を高めるために「称賛」の言葉かけ項目が平均 4.2 と強く認知していたということである。つまり、指導者は「称賛」の言葉かけをすることによって、競技者のやる気が一番高まると考えていた。しかし、競技者の「称賛」平均は 3.6 と指導者が思うほど「称賛」の言葉かけをされることによってやる気が高まるとは認知していなかった。このことは、競技者のやる気を高めるための言葉かけとして、指導者は「称賛」の言葉かけに頼りすぎてはいけないということを示唆している。ただし、大学生を対象にした大道ら（2002）は、サッカー初心者の初期段階では、ほめる指導は技術レベルの上達速度を向上させていくために効果的であると述べている。本研究での結果は、「称賛」の言葉かけであって、言葉かけを含んだ指導とは完全に一致しないが、この「称賛」の言葉かけは、指導の初期段階の言葉かけにおいても競技者のパフォーマンスを高める有効な手段であると推察される。

2つ目の項目である「叱責」では、指導者および競技者ともに低い値を示しただけではなく、指導者の方が競技者よりも「叱責」の言葉かけがやる気を高めないと認知していた。このことは、スポーツにおける「叱責」が、近年の社会的背景もあいまってハラスメントにあたりと自覚している指導者が多いと考えられるが、あくまでも推測の域を出ないため、今後継続して検討していく必要がある。

この「称賛」と「叱責」の言葉かけは、大道ら（2002）の研究結果と照らし合わせて考えていく必要がある。大道ら（2002）によると、スポーツ場面において、子供は指導者からの否定的な言葉かけはやる気を低下させ、肯定的な言葉かけはやる気を高めるとしている。本研究の結果でも、「称賛」が肯定的な言葉かけであり、「叱責」が否定的な言葉かけと置き換えた場合、大道ら（2002年）の報告を示唆するものであった。しかし、一方では名取（2007）の主張する「否定的なフィードバックを受けることによっても、『やる気』は低下せず、高まったことを示している」ということを示唆する結果とはならなかった。

3つ目の項目である「鼓舞」では、指導者と競技者ともに平均値よりもやや高い値を示していることから、指導者、競技者ともやる気を高める言葉かけであるという認知であった。しかし、両者ともに「鼓舞」得点が3点を少し超える程度であり、「鼓舞」そのものが指導者や競技者の言葉かけとしてそれほどやる気を高める言葉かけとなっていないことが明らかとなった。

以上のように、スポーツ活動時でのやる気を高める言葉かけについて、競技者と指導者の認知の違いを比較し、「称賛」と「叱責」のかかわりを指摘してきた。この言葉かけは、競技者と指導者の信頼関係に関わってくるものと考えられる。星槎大学は「共生」を科学する大学として研究と教育に力を入れている。その中で、スポーツ活動における競技者と指導者の言葉かけは、「人と人との共生」を考えた場合に、お互いを認め合うという信頼関係が必要となるという考え方にも通じるであろう。この信頼関係を築くためには指導者は競技者に

対して相手がポジティブになる、あるいはやる気を高める言葉かけによるコミュニケーションを積極的に取っていく必要がある。渋谷（2015）は、近年、競技スポーツの中でも共生という言葉が注目されはじめ、競争と共生が成り立たないのではなく、共生を示す行動がこれまでに行われていることを明らかにしている。また、渋谷（2014）も、「スポーツという『人と人との共生』を研究していきながら、共生社会を目指していくために共生を理解した保健体育教員やスポーツ指導者を育成する」必要性を主張している。このように指導者は、競技者の競技力を向上させるために指導を行うと同時に、その過程や結果として「人と人との共生」につながっていることを自覚する必要がある。

おわりに

本研究では、競技スポーツにおける「人と人との共生」について、競技者のやる気を高めるために行う指導者の言葉かけが、競技者のやる気を本当に高めているのかということ进行分析検討した。その結果、「称賛」と「鼓舞」などの言葉かけを用いることが有効なことで、「叱責」の言葉かけをあまり用いないことがよいということが明らかとなった。しかし、「称賛」の言葉かけだけに偏ってはその信頼関係を継続していくことが難しくなる可能性も示唆された。今後は、競技レベルやスポーツ種目間、練習と大会の別における指導者と競技者の言葉かけによる認知の比較など詳細な分析を検討していく必要がある。また、本研究で開発した「スポーツ活動での競技者のやる気が高まる言葉かけ」尺度の併存的妥当性に課題が残ったことから、合わせて継続的な検討を行っていきたい。

引用参考文献

- 遠藤由美・吉川左紀子・三宮真智子（1991）「親のしかり言葉の表現に関する研究」教育心理学研究, 39, 85-91.
- 長谷川悦示（2004）「小学校体育授業における『個人の進歩』を強調した教師の言葉かけが児童の動機づけに及ぼす効果」スポーツ教育学研究, 24, 13-27.
- 伊藤豊彦（2004）「スポーツへの動機づけ」日本スポーツ心理学会編, 最新スポーツ心理学, 大修館書店, 33-37.
- 伊藤豊彦（1996）「スポーツにおける目表紙構成の予備的検討」体育学研究, 41, 261-272.
- 北村勝朗（2001）「スポーツにおける構造的練習（deliberate practice）がパフォーマンス獲得に与える影響：異なる競技種目選手を対象とした定性的データ分析を通して」東北体育学研究, 19（1）, 8-19.
- 小谷克彦・中込四郎（2003）「運動部活動において指導者が遭遇する葛藤の特徴」スポーツ心理学研究第30巻第1号, 33-46.
- 松田岩男・猪俣公宏・落合優・加賀秀夫・下山剛・杉原隆・藤田厚・伊藤静夫（1981）「スポーツ選手の心理的適性に関する研究第3報」昭和56年度日本体育協会スポーツ科学

- 研究報告 No. Ⅲ, 1-39.
- 奈須正裕 (1988) 「Weiner の達成動機づけに関する帰属理論についての研究」教育心理学研究, 37, 84-95.
- 名取洋典 (2007) 「指導者の言葉かけが少年サッカー競技者の『やる気』に及ぼす影響」教育心理学研究, 55, 244-254.
- 西口利文 (2000) 「学校場面における教師の心理的要因と児童への言葉かけとの関連」名古屋大学紀要 Vol47, 117-138.
- 西田保・猪俣公宏 (1981) 「スポーツにおける達成動機の因子分析的研究」体育学研究, 26, 101-110.
- 西田保 (1978) 「競争場面における運動パフォーマンスに及ぼす達成動機づけの影響」体育学研究, 23, 13-23.
- 大道等・北湯口純 (2002) 「運動指導と言葉かけ—サッカー指導を中心に—」体育の科学, 52, 681-686.
- 渋谷聡 (2014) 「体育実技科目における通信制大学と通学制大学の比較～『陸上』および『バレーボール』の身体活動量を対象として～」星槎大学紀要共生科学研究 NO.10, 55-67.
- 渋谷聡 (2015) 「スポーツ心理学を生かした『誰でもできる陸上競技』練習法・指導法 中学校・高校編」星槎大学出版会, 11-12.
- 田中幸代 (1995) 「好かれる教師・嫌われる教師の言葉かけと学習者の学習意欲に関する研究」永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要 25, 73-79.
- 矢澤久史 (2007) 「指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響」東海学院大学紀要, 1, 211-307.
- 山村孝之 (2001) 「体育・スポーツ指導時における指導者の言動に関する留意点について—学生にとってうれしかった言葉、嫌だった言葉の調査より—」日本大学医学部一般教育研究紀要, 29, 9-17.
- 吉村功・日角知世 (2005) 「体育における教師や仲間からの言葉かけが他者受容感に及ぼす影響」北海道教育大学紀要 (教育科学編), 56, 183-192.